

末黒野

すぐろの

7月号 (通巻851号)



春灯

松本三千夫

日本人基地の桜へ列なして
春灯下口寂しさの花林糖
春灯を消しぬあしたへ稿残し
長閑けしや寺の耳門の少し開き
春愁やつのなし榮螺てふ銘菓
藤棚の波に攫はれ小半時
静けさに耐へきれず這ふ蜷の道
かげろふをまとひバス乗る岬道
春潮のふくれ来ボート遭難碑
壺焼や気付けばダイヤモンド婚
蘆若葉欄干のなき橋架かり
春行くと大気を吸へば甘かりき

遅き日

石垣に旧家の名残り松の芯
町なかも町のはづれも風光る
幼子はいつも小走り草若葉
遅き日を少し余してもどりけり
うららかや亭午の町の時の鐘
春愁や泡吹きて飲むカプチーノ
うららかや山鳩くるくるくる
曇天を重しおもしろと八重桜
大樹いま花の盛りの暗さもつ
かたつむり雨来て微光発しをり
野生馬のはるかな慕情泉湧く
さらさらと涼を敷きたる寝藁かな

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

花

田中臥石

約束の人来ぬ喫茶四月馬鹿
谷戸道の海一望や桃の花
左千夫碑や一位の花の枝を透き
左千夫碑の道辺を轟と野菊の芽
吟行の一步より濡る花の雨
花仰ぎゐて空耳のははのこゑ
浮かべたる桜ふたひらコツプ酒
薬湯へ妻と来て脱ぐ花衣
街空を風切返すつばくらめ
弔辞読む顔まざまざと余花明かり

ロゼワイン

森清堯

紅梅や日の斑の揺るる庵の縁
風光る堰をころがる水の音
春昼や泣く児笑ふ児母呼ぶ児
差し潮の川底濁り養花天
橋ごとに変はる高欄柳の芽
青空やひかり筋なす紅枝垂
花万朶しばし憂ひを忘じけり
ロゼワイン揺らすグラスや春の星
囀や磯馴の松の影の濃く
春眠の覚めて机辺の反故の数



花筵

森清信子

芽起こしめ雨のこまやか鳴立庵
着水のしぶき煌めき残り鴨
軽やかなる鳥語水音春日満つ
乳の足る赤子すやすや花筵
山葵田の綺羅をまとひて水走る
長靴の牧夫牛引く春野かな
草萌や蜻蛉返りの子に拍手
霊水のた走る岩や木の芽風
春宵の青きカクテル卓の燭
産卵の鯉腹を見せ花曇

万愚節

安齋久英

雨脚の定かならざる余寒かな
水温む流るる雲を引きながら
春暁の燃え色やがて波の綺羅
啓蟄の雨の遠山烟るかな
ふらここの足裏夕日を蹴り上げて
使はねば錆つく脳や万愚節
百千鳥上枝下枝を撓らせて
サーファーに絶好の波春深し
胸に刻む旅の思ひ出暮の春
これが彼の松輪の鯖か春の宵

春炬燵

石黒興平

天盛や本日よりと露の臺
歳時記と辞書の定位置春炬燵
カッターの少年少女風光る
掛け声に繰り出すオール春日燦
オール漕ぐ少女の髪へ春の風
急ぐ歩を思はず止むる初音かな
固さまだ残る川風花三分
さざ波となりて川面を春の風
射的の子のガンマン気取り花の昼
花散るや差し潮しるき汽水川



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



山 焼 き 堺 昌 子

好文亭 薨戸 開き 梅の風
山 焼 きの ひと 日 過ぎ たる 空の 青
花の 道 ゆう に ひと 駆 歩 ぎ けり
思ひ 出 の つ き ぬ ひと とき 花 の 下
大 和 絵 の や う な 菜 の 花 畠 かな
大 岡 川 の 流 れ に そ ひ て 花 の 風
上 手 と は い へ ぬ う ぐ ひ す 宮 の 柱

春 潮 齊藤マキ子

一 艇 の し づ か に 速 し 春 の 川
春 寒 や 路 上 ラ イ ブ の コ ー ド 延 び
春 の 泥 畦 に 飛 ば し て 耕 転 機
春 潮 に 投 げ た る 錨 群 か も め
春 は や て 螺 旋 に の ぼ る 歩 道 橋
曇 天 を 押 し 上 げ て ゐ る 桜 かな
ガ レ ー ジ へ 移 し て 雨 の 花 筵

桜 吉田きみえ

母 の 忌 の 供 花 と し 庭 の 花 杏
寺 庭 の 深 閑 と し て 初 桜
春 め く や 日 差 し を 背 の 針 仕 事
雨 止 み て 松 の 根 方 の 花 す み れ
朝 東 風 や 日 か げ る 峡 の 水 明 かり
鶯 の ひ と 声 溪 の 深 き かな
二 台 目 の 救 急 車 行 く お ぼ ろ かな

うららか 今村千年

笑み浮かぶ稚の写メールうららけし
うららかや塵出す漢立ち話
パレットに萌黄色足す木の芽晴
春の夢カンパネルラと星巡り
蜂飛ぶや黄昏迫る化粧坂
桜より桜へ渡る渡し舟
いくさなき七十年の花見かな

花貝母 岡田史女

靴底の片減りはげし鳥雲に
花貝母咲きて重行先生忌
うぐひすのしきりと港見ゆる丘
渦なして頒ちて花の神田川
飛花落花被く菩薩や飛鳥山
花びらと乗り込むちんちん電車かな
見えてゐて灯台遠き花木五倍子

風光る 岡野里子

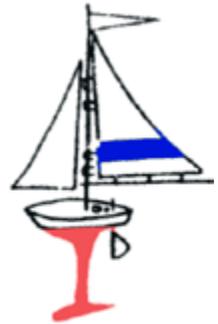
白木蓮かかぐる空のいよ濃し
瀬を早み堰音高し風光る
日向てふ浄土を占めて諸葛菜
枝先の迫り出す川面桜東風
先がけの一樹華やぎ朝桜
老木の幹より生まれ花二輪
桜はや筏組みをり船着場

仮面 小田嶋野笛

妻恋の鳥の声聞く彼岸寺
亀鳴くを聞きに天神参りかな
極楽の平穩に倦み狂ふ蝶
夢虫の暫し憩へり春手套
雨音へ五体あづけて朝寝かな
嘘聞かず真も言はず四月馬鹿
仮面めく春のマスクや大都会

青炎集

松本三千夫選



横浜 新谷フクエ

横浜 竹内涼子

天空の綻び突いて揚雲雀

落雲雀青き地球へ急降下

返還の基地の青空揚雲雀

雲雀野に開く弁当玉子焼

谷戸の丘万朶の花に膨める

パンジーの咲く庭に向きストレッチ

横須賀 大川暉美

横浜 太田良一

縫物の春日を掬ふ針の先

二駅を花より花へ並木道

青空を透して憩ふ花の下

風をよび風とむつめり雪柳

四つ目垣の竹の青さや丁字の香

芋植うる両手でそつと土被せ

神名備ゆ祝詞のとどく花の昼

シクラメンの隠るる花芽数へけり

菜の花の映ゆる川面やささら波

可惜夜の雨戸操る手や花月夜

行く鴨のみたび旋回湖の空

幼子に園の鳩寄る鼓草

花筏海へ最後の橋潜り

原つばを大きく使ふ雲雀かな

潮の香の遡上の河や朝桜

千体の地藏の寺や花の雨

風船を引つ張る空の蒼さかな

江の島の夕こそよけれ桜貝

横浜 川西栄江

番鴨引きたる池の静寂かな

近寄れば桜花咲く若木かな

春蘭を備前の壺に古道具屋

ネクタイの少し傾ぐ子新人生

区の花てふ花桃咲けり役所前

信号を待ちて一会や花吹雪

横浜 田村加代

ポストまで花見がてらの遠まはり

翼あるものがやけり芽吹山

花衣解きていつもの主婦の顔

独り居や日永の庭を掃くことも

触れしものみな芽吹きたり峡の道

逝く春の丘に佇み海の紺

横浜 神谷さうび

鉞彫の菩薩ふくよか暖かし

河童出て来さうな水辺夕霞

葦の角明日は水面を突き出でん

羽搏きて光を散らす春の鴨

さざ波の池広々と春意かな

紅椿落ちて水際に留まりぬ

横浜 早川八重子

露座仏の衣緩やか春の雨

真白なる仔犬先頭木の芽道

花万朶足の疎みを覚えけり

校庭の裏口飾り初桜

高層のビルの狭間や春夕焼

剪定の音の清しき朝かな

大網白里 岡井マスマ

自転車を止めてしやがみぬ花重

老桜洞に杉の子育ちをり

薬ゆる椽の抱きたり洞の声

靴跡へ歩を添はせゆく春渚

春の浜眼にちかちかと砂の粒

春潮やぽつんと残る見張台

横浜 伊藤由良

あるしなき空家守るごと花すみれ

春雨をききつまどろむ懈怠かな

鶴頸の花器に一筋雪柳

夕やみに白く浮きたつ花万朶

折々のうたを偲べる春夜かな

チューリップ昨夜のはやてに無残なり

耕 土 集

黒滝志麻子選



長閑けしや雀飛び込む源

新瀧 五味 紘子

屈託や八重の椿の身の重さ

囀や話の尽きぬ女学生

犬ふぐり星のごとくに地にあふれ

一年生初の重荷のランドセル

横浜 宮地 静雄

風光る洗濯干してぼんやりと

病床の読書三昧春の風

胆管結石花の前後を知らずして

飛行機雲わが家の空を香つらら

鎌倉やカメラ片手に風薫る

横浜 廣田 幸子

春風に誘はれて行く天満宮

交差点走りゆく子へ風光る

道の辺の隅から隅へ草青む

花の塵ためらひて踏む病み上り

春眠の心浮かるる旅の夢

横浜 是松 三雄

九重の雛に一重の臉かな

春泥の小さき靴を迎へけり

隠したきことは噂に春の風

かたくりの花に重たき今日の雨

蒲公英やいざ字宙へのビッグバン

新瀧 太田チエ子

名草の芽いまだ香りを秘めにけり

雪解けの風の攻めたる電波塔

削られて赤土の山笑ふなり

春風や高きヒールのふくらはぎ

虫だしの転がる越後平野かな

横浜 中里 昌江

武場へ手を引き合ひて一年生

やれやれと光差し来る朝つらら

菜の花をからし効かせて夕飼かな

二度目の嫁とや花は満開に

エコバック握りしむるや春風

横浜 伊藤 武文

崖のぼる鬼神のごとし恋の猫

春昼のまぶし弦楽四重奏

百歳の曲り木潜る花の道

投身の玉川上水花筏

花の雲ひきよせたきは藤枕

八重桜

小川 玉泉

(名誉顧問)

眼の下に広がる渚花の山
山里の郷社しづもり八重桜
中庭へ平屋根を越え散るさくら
夕陽を浴び白妙の八重椿
江ノ電の乗車制限みどりの日
南風強し江の島目指す波の群れ

雑記帳 1

大阪府吹田市から藤沢市に移り住んだのは昭和二十五年で、現在に至っている。俳句は昭和二十三年から昭和三十七年まで「南風」と「馬酔木」の会員であった。